



関西 3 支部新春合同例会のご案内

「めざせ！図書館発、USTREAM 中継！～基礎から、集客ノウハウまで」

京阪神エリア初！ Code4Lib JAPAN ワークショップ開催！

日 時：2011 年 3 月 19 日（土）11:00-18:00

場 所：関西学院大学 大阪梅田キャンパス 14 階 1405 教室

講 師：岡本真（アカデミック・リソース・ガイド株式会社）
林 賢紀氏（農林水産研究情報総合センター）

参加費：大図研会員は 2000 円 / 非会員は 2500 円

（非常勤職員の方 または ノート PC ご持参の場合は -500 円）

申込方法：事前申込制とさせていただきます。3 月 15 日(火)までに、以下のサイトからお申込ください。申込多数の場合は、定員 30 名の先着順となりますので、お早めにお申し込みください。

<http://kokucheese.com/event/index/7992/>

ワークショップ内容：

図書館や自分の所属する勉強会などで、講演やちょっとした研修をネット配信できたら・・・そう思うことは、ありませんか？今、もっとも手軽にチャレンジできるネット中継に、USTREAM があります。今回の新春合同例会は、その USTREAM について、ワークショップ形式で学んでみたいと思います。

1. まずは USTREAM の基本操作を学ぶ

2. その上で、USTREAM 中継を盛り上げるためのスキルを学ぶ

ワークショップは、講師の指導を受けつつ、他の受講者と教えあいながら、体験を重ねてスキルアップしますので、USTREAM をまったく知らない方でも、一から学ぶことができます。

今回の特長は、単なる中継技術にとどまらず、Twitter と連携するなど、どのように USTREAM 中継を盛り上げ、いかに図書館のプレゼンスを高めるか、といったノウハウを学ぶことにあります。

[目 次]

関西 3 支部新春合同例会のご案内	…	1
小特集：大図研京都ワンディセミナー「障害学生支援の新たな潮流：大学における障害学生支援課題と図書館の実践報告」 参加報告	…	2
大学図書館としての障害学生支援を考える	三本木 彩	… 2
「できることから始めよう！」－2 大学の取組事例－	藤山 優美	… 5
広がりを見せる障害学生支援について	日置 将之	… 6
連続企画：わたしの図書館紹介します！		
紹介番号 1 京都大学工学研究科桂地球系図書室	坂本 拓	… 10

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

小特集：大図研京都ワンディセミナー「障害学生支援の新たな潮流：
大学における障害学生支援課題と図書館の実践報告」 参加報告

「障害学生支援の新たな潮流：大学における障害学生支援課題と図書館の実践報告」を
開催いたしました。

講 師： 村田淳氏（京都大学 身体障害学生相談室 相談室員）
河野恵美氏（立命館大学 教学部 共通教育課 サービスラーニングセンター
障害学生支援室 主事）
丸山浩史氏（立命館大学 図書館サービス課）

日 時：2010年12月18日（土）13:30～16:45（13:15～受付開始）

場 所：京都私学会館 205 会議室

（地下鉄四条駅、阪急京都線烏丸駅下車 徒歩5分）

主 催：大学図書館問題研究会 京都支部

参加者：40名

小特集：大図研京都ワンディセミナー「障害学生支援の新たな潮流：大学における障害学生
支援課題と図書館の実践報告」 参加報告

大学図書館としての障害学生支援を考える

三本木 彩

2010年12月18日京都私学会館にて、大図研京都ワンディセミナー「障害学生支援
の新たな潮流：大学における障害学生支援課題と図書館の実践報告」が開催されました。
講師3名による講演が行われ、それぞれの大学における障害学生支援と主に視覚障害学
生への図書館支援についてのお話を伺いました。障害学生支援について大学図書館のお
話を聞く機会は少ないので、今回のセミナーはとても貴重な機会となりました。

村田淳 京都大学身体障害学生相談室相談室員
「大学における障害のある学生への修学支援について」

最初の講演1では京都大学の村田さんによる、障害学生支援の概要と京都大学での取
り組みについてのお話でした。

まず障害学生支援が行なわれるようになった歴史的背景から近年の状況まで、総論として障害学生支援についてのお話がありました。近年は高等教育機関へ進学する障害学生が増加しており、特に発達障害の認識が広がり支援を要する事態の表面化されてきたこともあり、統計的に発達障害学生が増えているそうです。統計に表れているのは実在数ではなく、まだまだ潜在的な支援を必要とする学生がいるのだらうと伺えます。村田さんは「障害学生支援の原則」として次の3点を挙げています。「全ての学生に質の高い教育を」「成績評価のダブルスタンダードは設けない」「学生の自立につながる支援を」。そしてこの原則を実現するためには窓口の明確化・学内連携・教職員の協力が欠かせないと仰っています。

次に「京都大学の障害学生支援の現状」として、身体障害学生相談室の設置経緯や支援内容の紹介がありました。京都大学の身体障害学生相談室では相談員が常駐し、受験時の相談から就職相談まで学生生活全般にわたってサポートしているそうです。2007年の開室以降、要支援者の在籍数が増加しているのは単に障害のある学生が増加したというだけでなく、相談室の設置によって顕在化したと言えます。また相談室が作成した「京都大学フリーアクセスマップ」をいただきました。このマップはエレベータの設置や車椅子用トイレ設置の表示だけでなく、通路の狭さや坂道の表示など細かな点をカバーしています。

最後に「障害のある学生に対する図書館での対応について」として、図書館へのアドバイスをいただきました。まずは設備・情報・人の環境を整えること。建物のバリアフリーや図書館資料の充実、情報保障、そして障害を理解する心理面での環境整備が必要であるとしています。設備もただあるのではなく、常に利用できる状態であるか意識しなければならないと指摘されています。さらに視覚障害・聴覚障害・肢体不自由の各障害の基礎知識と対応のポイントをまとめてくださりました。しかし紹介した対応はあくまで一般論とし、もっとも有効な対応方法はコミュニケーションであると仰っていました。学生の必要に応じた適切な声かけが望まれるというのは、障害学生だけでなく利用者全体への対応にイえることです。

全体を通して村田さんは、「障害学生支援は最低限のインフラ」、「障害のある学生のための環境整備は他の利用者にとってもより良いものとなる」、「できることから始めることが重要である」と仰っていました。

河野恵美 立命館大学教学部共通教育課サービスラーニングセンター障害学生支援室主事 「視覚障害学生支援とテキストデータ化ー障害学生支援室での取り組みからー」

続いての講演2では立命館大学の河野さんによる、障害学生支援室についてとテキストデータ化を中心とした視覚障害学生支援についてのお話でした。

障害学生支援室は「障害学生の教育を受ける機会の平等を実現すべく支援を行う」「障害学生支援をとおしてすべての学生の学びと成長に寄与する取り組みを行う」「障害学生支援にかかわるFD/SDを通して大学全体の教育力の向上を目指す」という3つを方針とし、2006年に設置されたそうです。サポートに関わる総合窓口として、正課授業を受けるうえで必要な事項についての支援を行っており、授業担当教員や所属学部の担当職員への調整・相談・解決策の提供等で支援も行なうそうです。

次に支援室の行う支援の一つテキストデータ化について詳しいお話を伺いました。作業の流れは、まず視覚障害学生から依頼があり、それを複写やスキャンし、学生スタッフによってテキストデータ化する。そして修正済みデータのチェックを行い、視覚障害学生に提供されます。レジュメで一週間、書籍で一ヶ月かかり、視覚障害学生に提供する際は「個人利用誓約書」を提出してもらおうそうです。学生スタッフというのはサポート

学生とサポート経験の豊富な学生で支援室が指名した学生コーディネータからなり、学生スタッフの要請も支援室で行います。テキストデータにすることによって、視覚障害だけでなく、上肢が使えない学生、学習障害のある学生にも読書できるようになると仰っていました。一方でテキストデータだけでは解決できない問題も存在していると指摘されています。依頼予定と違う書籍の持込、コピーでの紙の裏表・文字方向がわからない、音声ソフトを使ってパソコンを使用できない、というように視覚障害学生の対応によってわかってくる問題があると仰っていました。

そして2010年の著作権法改正を受けて、2010年の7月から図書館でのテキストデータ化の運用が開始されたそうです。障害学生自身が卒業後も自分で勉強できる意義付けと環境を作るために、利用リテラシー研修の必修が整備されました。研修は概論編と実習編からなり、テキストデータについて学ぶだけではなく、サピエやDAISY図書なども紹介されているそうです。河野さんは学生の卒業後も見据えた対応の重要性を強調されており、教育機関である大学の図書館として求められていることは、自立的な利用をサポートすることで、障害学生支援も学生支援全体と同じことが言えるのだと改めて感じました。

丸山浩史 立命館大学図書館サービス課
「図書館における障害学生支援の実践」

最後の講演3では立命館大学図書館の丸山さんによる、図書館でのテキストデータ化を中心とした障害学生支援についてのお話でした。講演2でふれられた内容をさらに詳しく、図書館側からのお話をお伺いしました。

立命館大学図書館におけるテキストデータ化は障害を有する学生の増加、著作権法改正に伴うサービス拡大をきっかけに、2010年7月より図書館と障害学生支援室が連携して図書館資料のテキストデータの提供を行なうようになりました。更に2011年1月からはテキストデータ化の運用全てを図書館が業務委託の形態で行う予定になっているそうです。

図書館と障害学生支援室のコンセプトの違いとして、図書館は「自主的学習の支援を基本」とし、障害学生支援室は「正課授業の支援を基本」というようにすみ分けがなされているそうです。テキストデータ化の対象書籍も、支援室では正課授業に使用する書籍で学生本人の私物でなければいけません。図書館では図書館資料全体が対象になります。新聞やマイクロ資料を除いた貸出可能な図書と論文雑誌が対象となり、一人につき10件まで100日間の貸出が可能となっています。英語にも対応している点も重要だと思いました。

さらに利用までの流れを詳細に紹介いただきました。まずテキストデータ化の対応の依頼を受けると、利用者にはリテラシー研修を受講してもらいます。そしてメールとカウンターでの依頼受付を行い、図書館は申請のあった図書資料を準備して、出版社等へのテキストデータの提供を依頼します。データ化作業が完了すれば利用者への貸出となります。出版社のテキストデータ提供の対応はまちまちだそうで、著者の先生からの口添えがあるとスムーズに提供していただける場合が多いそうです。

テキストデータ以外の障害学生支援では、拡大読書器や点字プリンタ等の機器の設置や複写補助も行っていると紹介されました。2011年1月より支援機器を設置した部屋を対面朗読室という名称からユニバーサルアクセスルームへと改名されるそうです。利用者からの要望もあって改名となったそうですが、対面朗読だけではない利用ができることを伝えるには適した名称だと思います。

丸山さんも自立的支援の重要性を指摘され、さらに大学全体における平準化対応が必

要だと仰っていました。図書館、支援室、学生の所属部局が連携しあって対応していかなければならないのだと指摘されています。テキストデータ化の運用全てを図書館で行なうようになる、2011年1月以降のお話を改めてお伺いしたいと感じました。

以上3人の講師の方から、2つの大学の事例を基に大学における障害学生支援が紹介されました。私は学生の頃手話サークルに所属していたこともあり、大学に障害のある学生が多く進学していることは知っていました。しかし普段の業務では障害学生と接する機会もなく、不勉強なことに自分の大学でもどのような支援・サービスが行なわれているのかも知りませんでした。職員自身もどのような支援・サービスが行なわれているか知らないのなら、支援があるということを知らない学生も多いただろうと思いました。要望があるから制度を整えるのではなく、講師の方が仰っていた大学のインフラとして障害学生支援を整備する必要があるのだと強く感じました。

さんぼんぎ あや (京都大学文学研究科整理掛)

小特集：大図研京都ワンディセミナー「障害学生支援の新たな潮流：大学における障害学生支援課題と図書館の実践報告」 参加報告

「できることから始めよう！」－2大学の取組事例－

藤山 優美

2010年12月18日「障害者学生支援の新たな潮流」と題するセミナーが開かれた。前に参加したのはいつでテーマは何だったかさ思い出せないほど、大図研のセミナーに参加するのは久しぶり。ご無沙汰組の例にもれず、参加報告記を依頼されてしまった。(これまた「図書館職員数珠つなぎ」(だったか?)以来、十数年振りに支部報に寄稿することになった。)簡単ではあるが参加報告と感想を記したい。

講演会は、京都大学と立命館大学の身体障害者支援の取り組みや事例の紹介を中心に行われた。

京都大学からは、身体障害者学生相談室員の村田敦氏が、障害者学生支援の歴史的経緯や学生の実態調査報告、学内支援の現状、図書館での対応時の留意点などについて講演された。中でも、増えつつある「発達障害」についての説明は、最近身近で体感し対応に苦慮した経験もあり、大変興味深かった。この種の障害は、一般に障害だと認識されにくいので周囲も戸惑う上、本人も認識していないケースも多い。「優秀な成績で入試に合格した学生が実は発達障害であった」というお話はまさにこの例を象徴していたと思う。京大内に意外に多いというのもショッキングだった。図書館での対応ポイントとしては、ちょっとした気遣い、会話のコツ、工夫などでずいぶん障害者の助けとなることが分かった。

立命館大学からは、障害学生支援室主事の河野恵美氏が学内での支援体制とその内容を、図書館サービス課の丸山浩史氏が図書館における支援状況をそれぞれ講演された。

立命館大学でも、以前から障害学生への授業支援を中心に対策されてきたが、2010年1月の著作権法改正で大学図書館が、「当該視覚障害者等が利用するために必要な方式により、複製し、又は自動公衆送信を行うことができる」こととなったのを機に、図書館と学生支援室が連携して音声ソフトに適した形式のテキストデータの提供を開始したこと、その具体的な運用や作業方法、ご苦労等が紹介された。双方の業務分担も明確で、障害学生支援室は正課授業の支援を、図書館は自主的学習の支援を基本としている

とのこと。また、「大学は教育機関であり、障害を通して工夫を学び、障害の有無に関わらず大学卒業後も自学できる意識と環境を作る」を徹底したコンセプトとして、時には厳しく障害学生に接しているお話をきいて、ややもすれば、提供する側の「まあしゃあないか」との甘やかしと提供される側の甘えを容認しがちであることを、考えさせられる契機となった。

今回、数年振りにセミナーに参加したのは、障害者支援について、大学での具体的な取り組み事例情報を得たかったからである。そもそものきっかけは、今年度の学内研修で“障害者支援”研修の担当となったこと。まったく知識のない分野だったため、学内研修の講師を探すことも兼ねて、9月には全国図書館大会奈良大会にも参加した。第6分科会 障害者サービスに丸1日参加したが、各種支援団体や公共図書館の取り組みに目をみはるものがあり、いかに自分が無知であったか、勤務する大学図書館が遅れているかを思い知ることとなった。

大図研京都ワンディセミナー案内には、「大学として何ができるのか、図書館が何ができるのかを皆さんと考えてみたい」と記されていた。今回のセミナーに参加して、大学図書館は公共図書館などと比べるとまだまだ・・・という印象は変わらない。ただ2つの大学の障害学生相談室、支援室の取り組みや、試験的に開始したテキストデータ提供の事例を通して、「大切なのは出来ることから動き始めること」(京都大学村田氏)を実感できるセミナーだった。

企画した京都支部の皆さん、お疲れ様でした。ありがとうございました。

ふじやま ゆみ (京都大学経済学研究科)

小特集：大図研京都ワンディセミナー「障害学生支援の新たな潮流：大学における障害学生支援課題と図書館の実践報告」 参加報告

広がりを見せる障害学生支援について

日置 将之

2010年12月18日に、京都私学会館にて標記テーマのセミナーが行われた。このセミナーでは、京都大学と立命館大学から講師を招き、各大学における障害学生支援の取り組み等についてお話いただいた。本稿では、各講師が話された内容や質疑のあらましについて報告する。

1. 講演1 京都大学の取り組み等について

講演1では、京都大学身体障害学生相談室の村田淳氏から、障害学生支援の総論や京都大学における取り組み状況のほか、図書館での対応方法等についてお話しいただいた。

1. 1 障害学生支援について (総論)

日本学生支援機構の調査によると、障害のある学生数は年々増えており、特に発達障害の増加が顕著であるとのことだった。また、障害学生支援については「高等教育機関が備えるべき最低限のインフラ」や「各機関の教育力を測る要素」とも言えるようになっているそうである。

実際の支援に際しては、以下のような原則を意識する必要があると説明されていた。

- ①障害の有無に関わらず、全ての学生に質の高い教育を提供する
- ②成績評価のダブルスタンダードは設けない(スタートラインを揃える)

③学生の自立につながる支援を行う

この原則を踏まえた取り組みの実現には、以下の4点が必要であるとも述べられていた。

- ①各大学組織に応じた支援体制の構築
- ②窓口の明確化と専門担当者の配置
- ③学内リソースの連携、ネットワーク構築
- ④教職員の理解と協力

1. 2 京都大学の障害学生支援の現状

京都大学における障害学生支援は、2008年に設置された身体障害学生相談室が中心となって実施しているそうである。具体的な支援内容は以下の通りである。

- ①視覚障害：ガイドヘルプ、対面朗読、拡大読書器の設置等
- ②聴覚障害：ノートテイク、パソコンノートテイク等
- ③肢体不自由：施設・設備の改善、移動介助等
- ④病弱虚弱：病状に応じた対応等
- ⑤発達障害：学習補助者の配置、配慮依頼通知等
- ⑥その他：支援物品・関連書籍の貸出等

1. 3 障害のある学生に対する図書館での対応について

図書館での対応については、京都大学での事例ではなく、一般的なポイントについてお話しいただいた。まず、図書館の環境（設備、情報、人）を整えることが重要であるとし、障害のある学生にとって本当に「使える」環境になっているかに注意する必要があると述べられていた。実際の対応は、障害の種類ごとに注意点が異なっているとのことである。ただし、個人差もあることから、最終的には本人にとって必要な対応を見極める必要があり、そのためには積極的なコミュニケーションが重要とのことだった。

最後のまとめでは、「大切なのは、出来ることから動き始めること」とであると締めくくられていた。

2. 講演2 立命館大学の取り組みについて

講演2では、立命館大学障害学生支援室の河野恵美氏と、立命館大学図書館サービス課の丸山浩史氏からお話しいただいた。

2. 1 「視覚障害学生支援とテキストデータ化 障害学生支援室での取り組みから」（河野氏）

河野氏からは、障害学生支援室の概要と視覚障害学生へのテキストデータ提供等についてお話しいただいた。障害学生支援室は、障害のある学生へのサポートに関わる総合窓口として、2006年に設立されたとのことである。同室では、障害のある学生本人が希望し、その必要性が認められた場合に、正課授業を受ける上で必要な事項をサポートしているとのことだった。支援の中心は学生スタッフが担っており、支援に携わる学生の学びや成長も期しているとのことである。具体的な支援内容は以下の通りである。

- ①視覚障害：テキストデータ化、点訳、対面読書、代筆、代読等
- ②聴覚障害：ノートテイク、パソコンテイク、磁気ループの貸出、手話通訳等
- ③肢体不自由：教室配置の調整、身体介助、駐車スペースの確保等
- ④共通：履修手続き等の配慮、情報機器の利用支援、教員への配慮事項の相談・伝達等

テキストデータ化については、以下のような流れで実施しているとのことだった。

- ①視覚障害学生からの依頼（図書等の持ち込み）
- ②複写・スキャン・OCR

- ③テキストデータ化の作業
- ④修正済データのチェック
- ⑤視覚障害学生へのテキストデータ提供

このうち、学生スタッフが担当するのは最も手間のかかる③の部分で、誤認識の修正や音声認識ソフトに適した形式への加工等を行っているそうである。

そのほか、障害のある学生の図書館利用や、図書館でのテキストデータ提供等についてもお話いただいたが、その対応を通じて、様々な問題が見えてきたとのことだった。具体的には、大学や図書館の仕組みを知らず、テキストデータ利用のためのリテラシーも不足している学生が少なからずいるといったものである。これを受けて、障害のある学生を対象とした利用リテラシー研修を実施しているそうである。この研修は、図書館の利用ルールや障害のある学生が学習するための工夫等について学んでもらうもので、「学生自身が卒業後も自分で勉強できる意識付けと環境を作る」ことも意図した内容になっているとのことだった。

最後のまとめでは、障害学生支援について、以下の3点が重要であると述べられていた。

- ①多様化している障害のある学生への対応
- ②学生の卒業後を見据えた対応
- ③関係部署間での日常的な連携・情報交換

2. 2 「図書館における障害学生支援の実践」(丸山氏)

丸山氏からは、立命館大学図書館における障害学生支援等についてお話いただいた。立命館大学図書館では、2010年7月から図書館所蔵資料のテキストデータ提供を開始したとのことである。これは、著作権法の改正によって可能になったもので、障害学生支援室との連携事業とのことだった。図書館でのテキストデータ提供は、図書館所蔵の資料のみを対象としているため、正課授業で使用する書籍や学生の私物図書を対象としている障害学生支援室のデータ提供とは異なっているそうである。なお、2011年1月からは、テキストデータ提供の運用を委託で行う予定とのことである。

そのほか、図書館では、障害学生支援機器利用サポートや複写補助、ガイドヘルプ等を行っているとのことだった。なお、貸出冊数等の基本的な利用条件は、原則として健常者と同じとのことである。

最後のまとめでは、立命館大学における障害学生支援のコンセプトとして「自立的支援」を挙げるとともに、図書館で留意している事項として以下の5点が挙げられていた。

- ①ルールの理解と徹底
- ②教育的指導との切り分け
- ③健常者と同様のサービス
- ④複数体制での対応
- ⑤対象者等の共有化

3. 質疑応答

講演の終了後には質疑応答の時間が設けられており、活発な質疑がなされていた。主な質疑の内容は以下の通りである。

【デイジーに関する取り組みはあるか？】

村田：有効なツールとして可能性には期待しているが、京大では取り組みが進んでいない。紹介はしているが、デイジーに精通している学生も少ないのが現状である。

河野：デイジーに対するニーズがまだない。さしあたっては、テキストデータでの提供が中心となる。デイジーに関する情報提供はしていきたい。

丸山：ゆくゆくは取り組んでいきたいと考えている。

【テキストデータ化に際して、出版社へデータ提供の要請は行っているか？】

河野：出版社への問い合わせはどの本でも行っている。障害に関する本や5年以内に出版された本は、提供してもらえることが多い。著者からの口添えがあると、ほぼ確実に提供してもらえる。

【学生支援スタッフの数を教えて欲しい。また、立命館の学生支援スタッフは、今もテキストデータ化を手伝っているのかを知りたい。】

村田：京大の場合、のべ人数で100～200人程度かと思われる。主にノートテイクや対面朗読をしてもらっている。

河野：立命館の場合、多い時は160名程度の登録があったが、現在は支援を必要とする学生が減っているため、80名程度となっている。パソコンテイクについては、20～30名程度が実働している。テキストデータ化については、多い時は30名程度いたが、現在は開店休業状態となっている。

丸山：立命館図書館は、今のところ学生の投入はしていない。

【障害のある教職員への支援や、学会・就職活動への支援は行っているのか？】

村田：京大の身体障害学生相談室では、障害のある教職員への支援は担当していないが、たまに相談がある。その場合は人事課にあげている。学会等については、数はそう多くないが個別に対応している。就職ガイダンス等については、京大主催の場合はもちろん支援するが、別の団体が主催の場合は、その団体に依頼するよう学生には助言している。

河野：立命館の場合、就職関係はキャリアオフィスが担当しているが、学外にて行われることについて心配事があれば、相談に乗ることはある。ただし、学外に人は派遣していない。学会関係は、教員の指導下でやっているので支援室はからんでいない。

丸山：立命館図書館の場合は学生のみが対象のため、教職員への支援はしていない。

4. 所感

私が所属している公共図書館では、2010年1月に施行された改正著作権法を契機として、障害者サービスの様相が変化しつつある。そこで、大学図書館でも同様に変化しつつあるのかを知りたいと思い、今回のセミナーに参加させていただいた。

実際に講師の方々によるお話を伺って、大学でも着実に取り組みが進みつつあると感じた。特にテキストデータ化については、公共図書館よりも数歩先を行っているとの印象を受けた。公共図書館では、テキストデータ化を実施している館はまだほとんど無いと考えられるが、今後は実施の流れが強まると予想される。今回伺った大学での取り組み事例は、実施に際して大変参考になるだろう。

個人的には、村田氏をご紹介くださった「京都大学フリーアクセスマップ」に興味を引かれた。この地図は、障害のある人が目的地にアクセスしやすいように、経路上のバリア（障壁）等を細かく記載したものである。視覚障害者への提供方法には工夫が必要かと思うが、公共図書館においても、最寄り駅等から図書館までの経路について、同様の地図を作成できるのではないかと思われる。

今回のセミナーに参加して、障害のある方への支援に関する考え方は、公共図書館、大学図書館ともに同じであると感じた。障害があることで、知る機会や学ぶ機会に少しでも制約が生じているのならば、その制約を可能な限り除去するための努力をしていくことが必要であろう。

ひおき まさゆき（大阪府立図書館）

連続企画：わたしの図書館紹介します！

紹介番号 1 京都大学 工学研究科桂地球系図書室

坂本 拓

今日は、私の勤務している図書室、京都大学工学研究科 桂地球系図書室を紹介させていただきます。

1.京大の図書室について

初めて聞かれる方はみなさん驚かれますが、京大の中には図書館（図書室）が 56 以上あります。中央館となる附属図書館のほかに、基本的に各学部・研究所がそれぞれの図書館を有しており、さらには、一つの学部で、10 室以上の図書室を擁しているところもあります。私の所属している工学部・工学研究科もその一つで、吉田本部キャンパスに 6 つ、工学部専用の桂キャンパスに 4 つの合計 10 の図書室から構成されています。2 年後には、更に一つ増えて 11 室になる予定です。

京大の工学部では、学部の 3 回生までは吉田キャンパスで、それ以降の 4 回生・大学院生は基本的に桂キャンパスで授業を受けさせ研究を行わせる、という教育形態を取っています。そのために工学部の化学系・地球系・電気系・建築系・物理系、のそれぞれで、吉田キャンパスと桂キャンパスの両方に図書室を展開せざるを得なくなり、現在のよう多数の図書室が存在する状況になっています。人員配置の観点からあまり好ましい状況ではなく、せめて同一キャンパスの中では、図書室をまとめるべきではないか、という議論は絶えず行われていますが、諸事情によりなかなか難しいのが現状です。

2.工学部 地球系について

私の所属している地球系は、非常に学際的な分野です。地震の起因、災害復興、海底地下資源調査、津波の発生、道路計画、景観デザイン、上下水道の管理、公害の対策など極めて多岐に渡り、実験により研究を行う典型的な理系の研究室もあれば、都市デザインのために歴史や地理の古文書を読む研究室もあります。また、地震やインフラ関係の研究が多く、G30 が採択されていることもあるため、地震の多い東南アジア、特にインドネシアからの留学生が非常にたくさん来ています。このように多彩に行われている研究を、現在吉田キャンパスの地球工学科図書室と、私の桂地球系図書室の 2 室で支援しています。どちらの図書室も職員は 1 名しかいない、完全な一人職場です。

3.桂地球系図書室の概要

私の図書室は、8 席しか閲覧席がない非常にこぢんまりとした閲覧室と、4 つの書庫から形成されています。4 つのうち 2 つの書庫は閲覧室からやや離れているため、出納のために毎日廊下を走り回っています。利用者は 1 日に 20 人ほどで、その約半数が留学生と外国人教員です。蔵書数は、吉田キャンパスの地球工学科図書室と併せても 5 万冊ほどしかありません。しかしお宝資料として、戦前に学生が鉱山に実習に行った際の手書きの報文が図版つきで数多く残されており、当時の歴史を研究している日本全国の

様々な研究者が、このコレクションを閲覧するために来室されます。また地図に関して国土地理院ができる以前の貴重な資料が多く、当方の教員も「お宝を拝ませて！」と時々やってきます。これら地図コレクションが未整理であることが悔やまれます。

4.日々の業務

【閲覧系業務】

先にも申しましたように、同じ地球系の中でも蔵書が分断されており、また桂キャンパスには小さな図書室が4つしかないこともあって、ここでは利用者のニーズを満たすことは全くできません。そのために学内・外のような様々な図書室から資料を取り寄せるILLが、業務の中で大きなウェイトを占めます。

また、留学生・外国人教員等、日本語が全くできない利用者が大変多く、彼らへのサービスも重要な業務です。来日して最初の頃はなかなか研究室に馴染めないようで（特にイスラム圏の女性）、よく図書室に来て勉強をするのですが、大抵の留学生は、時間が経つにつれて図書室へ来る頻度が減ります。食堂などで、他の日本人学生と楽しそうにしているのを見かけるので、無事に研究室に居場所を作れたのでしょう。図書室で会う回数が減るのは少し寂しいですが、私も嬉しくなります。また、そうして図書室を巣立っていった留学生が、後から入ってきた同郷の後輩を連れてきて、図書室案内をしてくれたりします。ですので、TOEICの点数が人には言えないくらい低い私ですが、彼ら・彼女らの孤独感を考え、できるかぎり親身に奉仕するようにしています。夏休みや年末、母国に一時帰国した留学生たちが、わざわざペーパーナイフやボールペン等のお土産をプレゼントしてくれる時は、何より嬉しいです。

【整理系業務】

通常はひたすら遡及です。非常に古い地図など難しいものを除き、図書室所蔵の資料はほぼ遡及が終わったので、現在は研究室の遡及を進めています。図書室職員は代々日頃の行いが良いので（笑）、研究室の先生・秘書さんともかなり遡及に協力的で助かっています。

5.苦労

学生用図書のための資料費が図書室にはついていますが、例年は、教員に推薦図書を募るがあまり出でこず、最終的には資料費を使いきれない、ということになっていました。今年度からはそれを避けるため、教員からの推薦図書だけでなく、留学生も含めた学生に積極的にリクエストを募ると同時に、図書室職員の方で選書を行うようにしました。もちろん、私には流体力学や有限要素法などの主題知識は全くありません。選書の方法としては、教員は本当に研究に必要な資料は消耗品で購入して研究室の自分の手元に置くという習性があるので、それを利用して複数の教員が重複して購入している資料はコアな資料だろうと判断し、購入しました。方法としては、或る期間に地球系の全ての研究室が消耗品で購入している資料をシステムからエクセルに吐き出し、それをアクセスにインポートして、重複クエリをかける、という単純なものです。また、留学生から、大変多くの図書のリクエストが寄せられたのですが、あまりにも主題分野が偏っていたので、分野内で取捨選択するという、贅沢な作業も行いました。この作業も主題知識が必要になりますが、苦肉の策として、Web of Scienceで図書の著者を検索し、執筆している論文の被引用数や、掲載雑誌のインパクトファクターなどで、それぞれの主題分野内の優先順位をつける、という方法で乗り切りました。リクエストがあまり寄せられなかった主題分野については、私の方で書店のカタログを見ながら、同様の方法で、

選択をしました。いずれも自然科学の洋書だからこそ使えた方法です。

6.これから etc

今後は、文科省の方針から考えても、留学生は増える一方だと思われるので、留学生を対象とした利用者ガイダンスを、来年度には行わなければならないと考えています。また、地図等、十分コレクションと呼ぶに値する資料群があるので、これも利用可能な状態へと整理しなければなりません。大変でしょうが教員も協力してくれるでしょうし、やりがいのある仕事になると思います。

最近、「学術情報流通」という単語を大変よく耳にします。しかし、その「学術情報」の具体的な性質は、やはり研究者の近くの現場にいてこそ分かるものだと思います。学術雑誌には、通常の論文雑誌の他にレタージャーナルやレビュージャーナルがあるということ、実験データや統計データなど研究成果物になる以前の情報も、研究活動でとても必要とされているということ、査読を経ていないプロシーディング（しかも何十年も前の）が、論文と同じぐらい利用されていること、そしてやはり博士論文の需要の高さ、などです。これらを直接肌で感じることができる今の職場は大変勉強になる職場です。

このように、理系の一人職場も決して悪いところではありません。これをお読みのみなさまに、こんな職場で働いてみたいなあ、と少しでも思っただけなら、大変嬉しいです。

さかもと たく（京都大学工学研究科桂地球系図書室）

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2010年度（大図研会計年度2010.07 - 2011.06）に入っておりますので、2010年度の会費の納入をお願い致します。また、2009年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000（大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000）です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (kyoto@daitoken.com) まで。